

特集・宮崎汎会員が見た世界第1部映画編第10話

映画ベン・ハーの舞台チルコ・マッシモ（円型競技場）



30万人を収容した長さ620m・幅120mの円型競技場跡・右の遺跡はパラティーノの丘

城壁に囲まれたローマは土地が狭く平屋建ての家は見かけたことはないが、4、5階建ての石造りの家がびっしり建て混んでいる。だが古代遺跡や市民が憩う公園や広場はこれでもかというほど贅沢に保存され確保されている。

古代ローマ帝国の政治・経済の中心地であるフォロロマーノ（公共広場）に続くパラティーノの丘には、皇帝はじめ貴族など高貴な人々が居住していた。今は廃墟となっている丘の頂からの眺望は贅沢な眺めである。足下にはチルコ・マッシモ（＝伊語で最大の円型競技場）が緑の草原の趣で広がっている。チルコ・マッシモは文字通り巨大な円形競技場で30万人が観戦できた。競技場には中央分離帯があってその周りを戦士が馬車で駆け抜け、死闘を繰り広げたのである。眺めていると2千年前の興奮した観衆の大歓声が聞こえてくるような錯覚に陥る。

チルコ・マッシモを見て、思い出すのは数々のアカデミー賞を獲得したアメリカ映画「ベン・ハー」である。古代ローマ時代には大観衆を前にして、この広大な競技場を馬車に騎乗して文字通り死を賭して戦ったのであろう。

当時の競技場の分離帯の痕跡は今もかすかに残っている。分離帯にはローマ帝国の初代皇帝アウグストゥスが、エジプトから紀元前 13 世紀のオベリスクを運びこんだものが立てられていたが、現在は市内のポポロ広場中央に移されていてここにはない。



チルコ・マッシモの中央分離帯



ポポロ広場のオベリスク

映画「ベン・ハー」は、アメリカ人作家ルー・ウォーレスの小説を映画化したものである。監督ウィリアム・ワイラー、主演チャールトン・ヘストンで、アカデミー賞の数々を受賞した。監督賞・主演男優賞など 11 部門でオスカーを獲得し、今日に至るもアカデミー賞の最多記録は破られていない秀逸の映画である。

ベン・ハーは 1959 年アメリカで製作された。撮影はローマの撮影場のセットで行われたという。この映画は 3 時間半の長編映画で、ストーリーはチャールトン・ヘストン演じるユダヤの名家の男が、幼友達の親友が軍司令官としてエルサレムへ赴任してきて互いに旧交を温め合うが、エルサレムを愛し同胞を愛するベン・ハーは、ローマの中央にしか目が向いてない軍司令官の願いを聞き入れない。軍司令官はローマに敵対する思想は許さないと息巻く。偶発的な事故が起こり軍司令官は自分に従ってくれないベン・ハーを奴隷としてガレー船の漕ぎ手に陥れ、さらにベン・ハーの母と妹を牢獄に閉じ込める。ガレー船の船底で鎖につながれた 200 人の漕ぎ手の中に復讐に燃えるベン・ハーの姿があった。海戦の最中軍船全体を指揮する総司令官の命を救い信頼を得る。ベン・ハーによって命を救われた総司令官は亡くなった息子の代わりにベン・ハーを養子に迎え奴隷の身分から解放し自由とする。



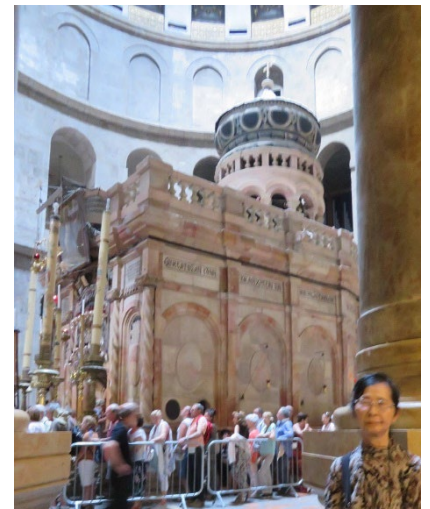
古代ローマの戦車

り身を隠していた。ようやく尋ねあてた母と妹の悲惨な姿をベン・ハーは遠くから垣間見て苦悩する。イエスキリストがエルサレムのゴルゴダ (=シャレコウベの意) の丘で磔になる。その時嵐がやってくる。稲妻と雨にあたった母と妹に奇跡が起こり、死病が跡形もなく治りベン・ハーと喜びの再会を果たすといった物語であるが、戦車競走の場面が強烈な印象を与えラストシーンの様な錯覚をするがさらに後段の信仰の話へと続いていく。

画面を見ていて思わず涙する場面もあり深く記憶に残る映画であった。(2017年)

ベン・ハーは戦車戦士として名をあげる。養父に願って母と妹の行方を知るため、故郷エルサレムへ戻る。今や戦車競走では負け知らずのかつての幼友達の軍司令官に人生をめっちゃめっちゃにされ復讐心に燃えるベン・ハーが戦車競争に挑む。大観衆の前で繰り広げられた戦車競走の熾烈な争いは、手に汗握る大迫力の場面で高らかなファンファーレの響きとともにベン・ハーの騎乗する白馬の4頭立ての馬車と敵役が騎乗する漆黒の馬車が死闘を演じる。チャールトン・ヘストンが燃える様な精悍な形相で勝利する。復讐の対象であったかつての友は落馬し命を落とす。

さらに物語は続き救世主イエス・キリストの物語になる。探し当てた母と妹はローマの牢獄で死病にかかり死の谷でひっそり



ゴルゴダの丘にあるキリスト
終焉の地に建つ聖墳墓教会内陣